

学内広報

for communication across the UT



特集：東京大学運動会航空部
全日本学生グライダー競技選手権大会 3位

2010.5.25

No. 1399



2010. 03. 13 埼玉県妻沼滑空場にて

特集

東京大学運動会航空部 全日本学生グライダー競技選手権大会3位

今月号の特集では3月6日から3月14日に行われた、全日本学生グライダー競技選手権大会での航空部の活躍と知られざるグライダーの魅力をお伝えします。

全日本学生 グライダー競技 選手権大会 観戦記

2010年度の全日本学生グライダー選手権大会は、3月6日(土)から3月14日(日)にかけて埼玉県熊谷市妻沼滑空場にて開催されました。東京大学からは、東和弘(当時4年)、土本浩祐(当時3年)の2名が出場しました。積雪のため数日間競技が中断されるなど気象条件に恵まれない中で、少ないチャンスをつかみ見事団体3位入賞、個人でも東選手が3位入賞を果たしました。全国大会出場は3年ぶりでしたが、団体3位、個人3位ともに歴代最高位となりました。

競技会ルポに入る前に、グライダー競技選手権大会のルールについて触れようと思います。学生のグライダー競技は「周回コース速度競技」と呼ばれるもので、決められた2つの旋回点(上空から見て目立つランドマーク)を経由して出発点に戻ってくるまでの時間を得点換算して競うものです。1チームは(1機に対し)最大3人で形成され、一番手

から順番にフライトを行い、3人の合計得点が団体得点に加算されます。この上昇気流の位置を予測し、他の機体との駆け引きをするなど総合的な判断力が必要になります。欧米では「空の上のチェス」と称されるほどです。

さて、それでは本大会のルポに入ります。

大会は1週間続く長期戦です。競技開始初日はいきなりの雨。この日は競技中止となりました。

2日目は、午前中は雨上がりで滑走路は水たまりですぐには使えない状況でした。滑走路を整備して13時から競技フライトが行われました。気象条件は好ましくなく、得点できたのは5選手のみ。東大は両選手とも無得点でした。

3日目から5日目はなんと(!!)降雪、積雪のため滑走路が使用不可能になってしまい3日連続で競技中止に。各チーム大会の緊張感を和らげようと温泉に

出向いたり、ボーリングをしたりと思い思いの時間を過ごしました。東大は、ボーリングと卓球をしてリフレッシュしました。

6日目にはようやく大会を行える状態に回復し、競技再開。気象条件は短時間しか良くなく4選手のみが得点となりました。東大4年東選手はこの日の最高得点500点を獲得し、総合成績では一気に3位に躍り出ました。東大3年土本選手が2番手として参戦しましたが、残念ながら得点はなりませんでした。

7日目は、限られた気象条件を生かし、2選手のみが得点。東大は無得点で順位に変動はありませんでした。

最終日8日目は天候に恵まれ、13選手が得点。この日東選手は8位で、総合成績では順位に変動がなく3位となりました。難しい気象条件の中で限られた選手のみ得点をした日に、トップの成績をとったことが、3位入賞につながったと思います。



01



東 和弘
工・4年(当時)

☆団体全国3位
☆個人全国3位

◆全国大会を振り返って◆

全体的に気象条件に恵まれない日が多く、限られたチャンスをかかものにできるかで勝敗の決まる大会でした。例年は5~7日間程得点日があるのですが、今大会はわずか3日しかなく、それゆえ一回のフライトにかかるプレッシャーは相当なものでした。そういった意味で、選手にとっては精神的に非常につらい一週間だったと思います。

3位という結果についてまず、自分が4年間やってきたことをこのような形で結果として残せたことに純粋に喜びを感じています。ただ個人的には優勝を狙っていただけに、100点満点の結果だったとは言い切れませんが、ワンミスでどこまでも順位を落としかねないような状況の中、最後まで3位を維持できたことにはある程度の満足感を感じています。

◆新入生にひとこと◆

大学4年間は、今までに比べて自由になる時間が増える分、ともしれば「なんとなく」過ごしてしまいがちです。勉強でも部活動でも、早めに自分のやりたいことを見つけ、悔いの残らないよう充実した大学生活をおくって下さい

02



土本 浩祐
工・3年(当時)

☆団体全国3位

◆全国大会を振り返って◆

今大会で東大チームが使用したのはASW24という部の最上級機なのですが、実はこの機体で大会に出場するのは7年ぶりのことだったんです。またチーム編成は1名でも出場可能ですが、その場合は団体成績はつきません。今回東大は2名チームでしたが、団体で出場したのも7年ぶり。これにはここ数年部員の人数が安定せず、普段の合宿では練習機しか出せない状況であったことや大会出場に際し必要な自家用操縦士のライセンスをとりつらかったことなどがあります。

最近では部員数も回復し、大会出場が実現したわけですが、その点で今回ASW24で団体でも成績を残せたことはその順位に加えて価値のあることだと思っています。

◆新入生にひとこと◆

大学では自分のやりたいことがたくさんできる一方で、自分から何もしなければただただ時間だけが過ぎてしまいます。勉強に励むもよし、趣味に打ち込むもよしですが何か少なくとも一つやりがいを見つければきっと有意義な4年間を過ごせると思いますよ。

図解 グライダーの飛ばしかた



STEP1
ウィンチについて

②トレーラーに保管しておいたグライダーを組み立て、安全に飛べるかを毎朝点検します。パイロットとして責任を持って学生が自ら毎朝点検を行います。



STEP3
飛行開始!

④グライダーが曳航(ワイヤーで引っ張られること。)されているところ。かなりの角度で上がっているのがわかると思いますが、1分も経たないうちに400m~500mまで上がり、ワイヤーを切り離してそこから自由に飛ぶことができます。



STEP5
滑空

①グライダーはエンジンがついていないため、「ウィンチ」と呼ばれる機械によって飛ばします。ウィンチと1kmほど離れた位置にあるグライダーを鉄のワイヤーでつなぎ、ウィンチがワイヤーを高速で巻き取ることによって風揚げと同じ要領でグライダーは上昇していきます。

STEP2
グライダーの組み立て、点検



③機体やウィンチなど全ての点検を終え、準備が整うといよいよ飛行を開始します。グライダーにはエンジンがついていないのでワイヤーをつなぐまでは人力で引っ張ります。

STEP4
グライダーの曳航



⑤ワイヤーを切り離した後は自由に飛ぶだけです。エンジンがついていないので、高度は自然と落ちて行きますがうまく上昇気流にのれば1時間でも2時間でも飛ぶことができます。

しねがハントターナー

グライダー話あれこれ

◆グライダーとは

エンジンのついていない飛行機です。航空法では「滑空機」と表記されています。かつては日本でも製造されていましたが、現在はドイツ製がほとんどです。現在東大が所有しているものはドイツ製とポーランド製です。FRPとよばれる強化プラスチック製で軽くて頑丈に作られています。価格は安いものでも高級国産車並み(高いものは高級外車越え。)なので、長く大事に使います。

昔のものは強力なゴム紐を使って人力で引っ張って飛ばしましたが、現在のグライダーは飛行機やウィンチとよばれる機械で引っ張り、400m~500mほどの高度から飛びまわります。その後上昇気流を捕まえて時には1000m以上の高度に達することもできます。

◆エンジンがないと墜落するのは?

グライダーにはとても長い翼がついており低速(90km/h程度)でも安定して飛ぶことができるので墜落の心配はありません。また、その長い翼のおかげでゆっくり降下する(滑空する)ので、前へ

進むことができます。今回出場したレース機は1m降りる間に43m進むことができるので単純計算すると50m降りる間に2.1km以上進むことができます。また着陸装置も備えているので飛行場にしっかり帰ってくるすることができます。

飛んでいる間は風切り音しか聞こえず、旅客機や戦闘機のようなエンジンの爆音はまったくなく鳥のように空を飛んでいる感覚を味わえます。

◆エンジンがないと遠くに行けない面白くなさそう。

ワイヤーを400mで切り離した場合行けてもせいぜい15kmです。たしかにあまり遠くには行けません。ですが、グライダーは大気中の上昇気流の中を飛ぶことで高度を上げより遠くへ行く乗り物なのです。世界レベルのパイロットになると500kmや1000kmをグライダーで飛んでしまいます。もちろん動力を使わずに。グライダーの離着陸なら1年もあれば一人でできるようになりますが、目に見えない上昇気流をつかまえ、下降気流を避け、遠くへ行くというのはなかなか難しく奥が深いです。経験、技術、知識を総動員して上昇気流を捕まえる。グライダーがスカイスポーツとよばれる由縁です。あなたも一度やってみるとその魅力に取り付かれてしまうでしょう。

東大航空部とは

東京大学運動会航空部の歴史は長く、正確な創部時期は分かっていませんが、1930年10月に初飛行を行ったことは記録に残っており今年が飛行開始80周年になります。

創部当初は飛行機的设计から行っていました。徐々に飛行訓練へとその活動の中心を移し、現在はグライダーの操縦をメインに活動し、関東大会や全国大会、七帝戦、東京六大学戦、新人戦に参戦しています。

現在、部ではグライダーを3機所有しています。2人乗りの練習用機と一人乗りの練習用機、競技用機です。

活動は主に長期休暇を利用した年6回の1週間合宿と土日を利用した短期合宿を年3回行い、飛行練習を行っています。合宿のない時期は各自それぞれですが、基本的に勉強やアルバイトをしています。

部の規模は近年まで人数が最低ぎりぎりでしたが、ここ2、3年で急速に増え現在は総勢21名となりました。大会成績も順調に伸ばし七帝戦では一昨年優勝、昨年準優勝、2年連続新人賞を獲得。東京六大学戦は個人5位入賞団体3位入賞、そして今回、全国大会3位を勝ち取りました。

今東大でもっとも勢いのある部の一つです。





航空部Q&A

- Q: 運動神経が悪い私でもグライダーってできますか。**
A: グライダーは他のスポーツのような身体的特徴による有利不利は存在せず、男性女性が同じ条件で戦う数少ないスポーツです。もちろん運動神経は関係ありません。
- Q: グライダーって怖くないですか？**
A: グライダーで飛ぶことに慣れるまでは若干の恐怖感もあるかもしれませんが、慣れてくると大空を自由に飛び回ることの気持ちよさにやみつきになってしまいます。
- Q: グライダーの魅力ってなんですか？**
A: 大空を自由に飛べることです。飛行機と違いエンジンを使わず、自然の力を利用するのも魅力です。
- Q: 何か資格は必要ですか？**
A: 免許が必要ですが、健康であれば誰でも取得することができます。航空部で2年から3年の練習を経て得ることができます。
- Q: 部費が高そうです。**
A: 安全に空を飛ぶための保守整備のために他の活動と比べると少々高いですが、大空を自由に飛びまわれるということを考えたら高いとは思いません。
- Q: どのくらいで飛べるようになるのですか？**
A: 入部したらすぐに飛行訓練が始まります。一人で操縦できるようになるのに1年程度でその後は各自のがんばり次第でいくらかでも飛べるようになります。
- Q: 部の雰囲気はどんなかんじですか？**
A: 合宿以外の時は上級生から下級生まで仲良く活動していますが、合宿中は安全を第一におのおのが真剣に訓練に取り組みます。

東大航空部、パイロット募集中。

★グライダー診断★

こんなあなたは東大航空部に向いてる！？

- 空が好き
- 人と違うことがしたい
- 鳥人間になりたい
- パイロットになるのが夢だった
- 機械をいじりたい
- 最高の仲間に出会いたい
- 大学生生活を充実させたい
- 楽しいことがしたい

1つでも当てはまったら、
 いますぐ航空部HPにアクセス！
<http://www.utsc.jp/top.html>

◆航空部基本データ◆

- 部員数: 21人(男19:女2)
- 活動日: 毎週水曜(ミーティングのみ)。
合宿は年6回。長期休暇を中心にそれぞれ1週間程度。
- 活動場所: 埼玉県妻沼滑空場
(最寄り駅:熊谷)
- 問い合わせ先: 堀智(工・3年)
t100668@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
- 部室: 駒場キャンパス学生会館105C

Designed by
 Chizuko Futsuki

NEWS

一般ニュース

産学連携本部

東京大学産学連携本部／大阪大学産学連携推進本部共催シンポジウム「大学発ベンチャーによるグリーンイノベーション」を開催

3月12日（金）14時より、情報学環・福武ホールにて、東京大学産学連携本部／大阪大学産学連携推進本部共催シンポジウム「大学発ベンチャーによるグリーンイノベーション」が開催された。

本シンポジウムは、東京大学と大阪大学の共催という初めての試みであり、「グリーンイノベーション（環境エネルギー技術・産業の革新）」がテーマであるため、注目度も高く、大学発ベンチャーや環境ビジネスにかかわる産学官関係者、学生等から約180名の参加登録があった。

影山和郎産学連携本部長の挨拶の後、東京大学関連の環境ベンチャーの取り組みとして、出雲 充氏（㈱ユーグレナ代表取締役）と、川端秀雄氏（バイオエタノール革新技術研究組合 技術開発本部長代行）、大阪大学関連として、高尾正樹氏（日本環境設計㈱専務取締役）と、吉野 巖氏（マイクロ波環境化学㈱代表取締役社長）からそれぞれ事業紹介の発表があった。ミドリムシの食品化や非食用原料を含む低コストの次世代バイオディーゼル製造プロセスの開発など、どれも大学から生まれた技術を事業化したものである。

パネルディスカッションでは、出雲氏、川端氏、高尾氏に加え、塚原保徳氏（大阪大学大学院工学研究科マイクロ波化学共同研究講座准教授）、隅田剣生氏（文部科学省産学官連携コーディネーター）がパネリストとして、各務茂夫（産学連携本部事業化推進部長・教授）がモデレーターとして登壇した。

世界中で温室効果ガスの削減が叫ばれる中、我が国は、2020年に温室効果ガスを1990年比で25%削減するとい

う目標を掲げ、環境エネルギー分野で世界をリードすることを新たな成長戦略と位置付けた。パネルディスカッションでは、大学発ベンチャーによるグリーンイノベーションの実現を目指し、大学発ベンチャーの事業モデルについて様々な観点から議論を行った。後半は一般参加者との質疑応答のセッションを設けたが、多くの質問、コメント、提案があり、活発な討論会となった。

最後に大阪大学産学連携推進本部総合企画部長の正城敏博教授から、本会議の総括と閉会挨拶があり、3時間にわたるシンポジウムを終了した。



シンポジウムを熱心に聴講する参加者



シンポジウムの様子

本部人材育成課

平成22年度新任教職員研修を開催

4月5日（月）から6日（火）にかけて、安田講堂において平成22年度新任教職員研修が開催され、5日は737名、6日は717名の参加があった。

昨年度に引き続き、今回で2回目となる本研修は、新任教職員が東京大学の構成員として必要な法令、規則等の基本的知識を修得することを目的とし、本学におけるコンプライアンスの徹底並びにFD・SDの取り組みの一環として実施された。



総長による開講挨拶

開講の挨拶において、濱田純一総長は、新任教職員への歓迎の言葉とともに、「将来が見通しにくい今日において東京大学が果たすべきことは、大学が持っている知識を基盤にして、次の時代をしっかりと創っていくことである」として本学及び本学教職員の任務について触れ、この任務を果たすための方針や具体的な取り組みをまとめた「行動シナリオ」について熱心に説明された。また、挨拶の終わりには、コンプライアンスの観点から本研修において職務遂行上の基本的なルールを学び、守ること、その上でより良いルールを模索することの重要性を強く説かれ、参加者は真剣な面持ちで聞き入っていた。

本研修の講義内容と講師は次のとおりであり、参加者の理解を図るための確認テストも実施された。限られた日程での多岐にわたる内容であったが、新任教職員が本学で勤務していく上での基礎的知識を集中して得られる有意義な機会となった。

『平成 22 年度新任教職員研修日程』

○4月5日(月) 9:35～17:20

- ・「総長挨拶」総長 濱田 純一
- ・「高等教育政策、国立大学法人の仕組み」
副理事・本部経営支援部長 鈴木 敏之
- ・「学務・学生支援」
本部教育・学生支援部長 矢野 由美
- ・「研究」
本部研究推進課長 糸井 和昭
- ・「産学連携」
産学連携本部知的財産部長・教授 小蒲 哲夫
- ・「情報システム」
情報システム本部副本部長・准教授 玉造 潤史
- ・「ハラスメント」
ハラスメント相談所
チームリーダー(専門員) 矢野 ゆき
- ・「アカデミックハラスメント」
学生相談ネットワーク本部学生相談所長・教授
倉光 修

・「メンタルヘルス」

教育学研究科兼

学生相談ネットワーク本部精神保健支援室・教授

佐々木 司

学生相談ネットワーク本部企画室長・特任教授

亀口 憲治



会場の様子

○4月6日(火) 9:30～17:25

・「大学の経営・財務」

本部研究推進部長 御厩 祐司

・「外部資金」

本部外部資金課長 石井 康雄

・「物品・サービスの購入」

本部契約課副課長(調達企画チームリーダー)

熊澤 鉄也

・「出張旅費の仕組み」

本部契約課副課長(旅費チームリーダー)

生越 浩二

・「資産の管理」

本部資産課長 川口 安名

・「会計システム」

本部決算課係長(財務会計システムチーム)

村岡 俊

・「監査の視点から」

本部監査課長 瀧田 忠彦

・「就業規則・服務」

本部労務・勤務環境課長 梶 正治

・「環境安全・防災」

環境安全本部企画調整部長・特任教授

小山 富士雄

安全衛生部長・教授 大久保 靖司

主幹・准教授 刈間 理介

部局 ニュース



大学院総合文化研究科・教養学部

三鷹国際学生宿舎で新生の歓迎会
行われる

4月10日（土）、三鷹国際学生宿舎において、今年も新生を迎えるためのパーティーが開かれた。新たに入居する学生の約8割が参加し、以前より居住していた学生を含めると全体では約300人もの参加があった。

このパーティーは宿舎生全員により構成される宿舎生会の代表である宿舎委員会（MSC）と、留学生の宿舎生活を支援する大学院生によるチューター組織である院生会が主催したもので、新生同士との交流の活発化を目的としたものである。

パーティー開始直前には共用棟前に受付の行列ができるほど大盛況で、パーティーが始まると新生同士で積極的に交流していた。



歓迎会開始直前には、共用棟前に長蛇の列

また、歓迎会のイベントの一つとしてビンゴ大会を開催した。所々に笑いも織り交ぜながらの進行で、会場全体が盛り上がっていた。当たり数字が発表されるごとに、歓声や溜息が会場に響き渡り、会場全体が一体となっていた。

ひとしきり盛り上がった後は、会場を共用棟から各棟に移した。共用棟の懇親会では居住棟にとらわれない交流を行い、各棟懇親会ではご近所同士の交流を深めてもらった。

昨年の歓迎会と比較すると参加人数も大幅に増え、三鷹宿舎も交流が盛んになってきているのを感じた。今後、益々の宿舎生間の親交のきっかけになってくれれば、と思う。



ビンゴの結果が出る度、会場には歓声と溜息が



早速できた友人と食事を囲みながらの交流

大学院人文社会系研究科・文学部

PESETO 人文学会議、開催される

4月10日（土）、中国の北京大学において第2回PESETO 人文学会議が開催され、北京大学、ソウル大学、東京大学の人文系部局の代表が集まった。本学からは小松久男人文社会系研究科長以下8名の教員が出席した。同会議はソウル大学の発案で、2007年から隔年で開催され、日中韓三カ国の人文学の学術交流をめざしている。

第1回目はソウルで開かれ、今回はその2回目。

同会議では「東アジアの文学と歴史における古典の現代的価値」というテーマが掲げられ、各大学代表の挨拶のあと、6つの研究報告と各報告に対する他国研究者からのコメント、さらに一般参加者との質疑応答が行われた。日本からは、古井戸秀夫教授と藤原克巳教授がそれぞれ「歌舞伎の『三国志』」と「東アジアのなかの『源

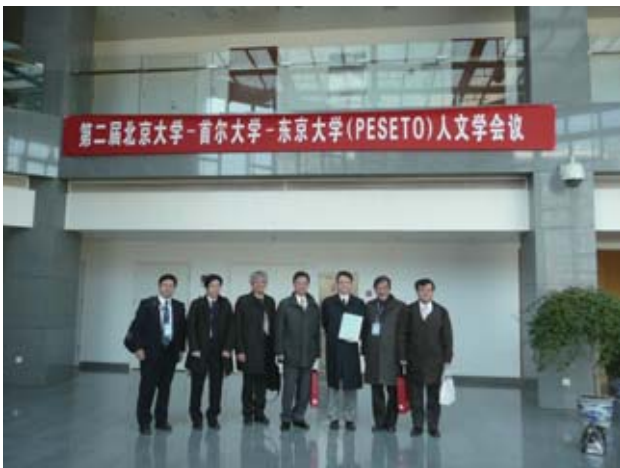
氏物語』』についての報告を行った。

古井戸教授は、『三国志演義』のなかで五虎大將軍の一人として人気のある関羽が、日本人の間でもいかに愛され、歌舞伎や浮世絵などで翻案され続けてきたかという点について説明した。同教授によれば、歌舞伎『関羽』は、歌舞伎十八番のなかで「唯一、外国人の英雄豪傑を描く作品」であった。また二代目団十郎が『関月仁景清（うらおいづき-ににんかげきよ）』のなかで演じた関羽は当時の江戸で人気を博し「四ヶ月のロングラン」となった。

藤原教授は、国風文化の典型と考えられがちな『源氏物語』がいかに中国の古典文学を踏まえたものであったかについて、多数の例を引きながら明らかにした。この報告に対しては、北京大の嚴紹瑩教授から、古代東アジアにおける「文化共同体」の存在を証明したものであり、「21世紀の東アジア文化と文明の発展に貴重な経験」を提供したものだとのコメントがあった。

このほか日本側からは、六反田豊准教授（朝鮮史）、佐川英治准教授（中国史）、川原秀城教授（東アジア思想史）、大西克也准教授（古代中国語学）らが、中国側・韓国側からの報告に対して論評した。

なお第3回会議は、2年後に本学で開催されることとなっている。



本学からの参加者

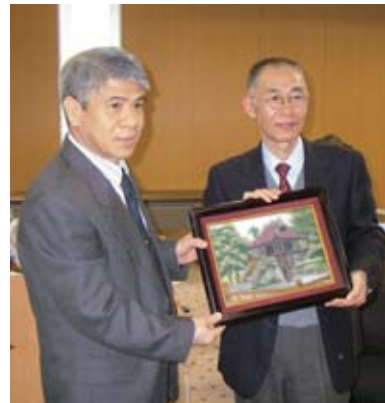
大気海洋研究所
ベトナム科学技術アカデミーの一行が大気海洋研究所を訪問

4月16日(金)、ベトナム科学技術アカデミー(Vietnam Academy of Science and Technology)のDuong Ngoc Hai 副院長・教授他、ベトナム計画・投資省、財務省の関係者ら7名が大気海洋研究所を訪れた。今回の来訪は同アカデミーが「南シナ海における自然資源と環境国際協力調査プログラム」に基づき、今後の海洋科学における関係国との連携を図ることを目的として実現したものである。大気海洋研究所側は西田周平国際連携研究センター教授をはじめ、教職員・学生10名が対応し、活発

な意見交換が行われた。今後は平成13年度より実施している日本学術振興会の拠点大学交流事業「沿岸海洋学」に続く、ベトナムとの新たな研究交流につながることを期待できる。



大気海洋研究所の新棟玄関にて記念写真



Hai 副院長と西田教授

大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で自衛消防訓練行われる

4月18日(日)10時から、三鷹国際学生宿舎において、三鷹消防署の指導・協力により自衛消防訓練が行われた。

三鷹国際学生宿舎は、鉄筋コンクリート3階建て6棟から成り、現在教養学部在籍する学生及び留学生等約580名が入居している。建物は耐火建築であるが、宿舎の性格上火災等の防災には十分注意を払っており、その一環として万一の場合を想定し、年に1回自衛消防訓練を実施している。

当日は晴天に恵まれ、留学生を含む宿舎生及び宿舎職員、警備員約100名が参加して実施された。

訓練は、宿舎生の居室から火災が発生したことを想定して、火災報知器の発報により、宿舎生、警備員、職員それぞれがどのように対応し、安全に避難するかを確認する避難訓練から開始した。

その後、2班に分かれ、水入り消火器を使用しての消火訓練、屋内消火栓を使用しての放水訓練などを行えたことは、とても有意義であった。

最後に、今回指導をいただいた三鷹消防署より講評をいただき、訓練は終了となった。



水入り消火器による消火訓練



消火栓による放水訓練

大学院農学生命科学研究科・農学部

附属生態調和農学機構の開所式及び
開設記念公開講演会

2010年4月1日に本研究科に設置された附属生態調和農学機構（以下「機構」と記す）の開所式（11時～）と開設記念公開講演会（14時～）を4月24日（土）に開催した。

機構は、附属農場と附属緑地植物実験所を統合・改組し、附属演習林田無試験地の教育・研究機能を組み入れて設置された教育研究施設であり、生態系と調和した農林業と社会のあり方の探究を目指している。

開所式では、来賓の坂口光治西東京市長と磯部雅彦副学長にご挨拶を頂き、また生源寺眞一研究科長が機構開設の背景と展望を述べた。小林和彦生態調和農学機構長が機構出発の抱負を述べた後、機構教職員全員を紹介した。出席者は約50名であった。

午後の開設記念公開講演会では、西東京市民を始めとする一般の方を含めて約85名の参加のもと、生源寺研究科長と松本洋一郎理事（副学長）の挨拶と、小林機構長、

二宮正士同教育研究部長による講演があった。参加者からは、「農に対するイメージが一変した」、「大変興味深い話で、環境と持続性の重要性を理解できた」、「このような機会をもっと増やしてもらいたい」、「地域住民にも開かれた研究教育施設としての発展を望む」など、好意と励ましのご意見を、合計27名の方から頂いた。



磯部副学長（左）と坂口西東京市長（右）開所式にて

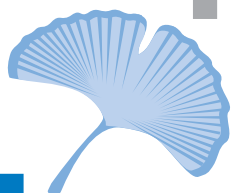


米川智司准教授から説明を受ける磯部副学長。機構見学会にて



松本理事（副学長）。開設記念公開講演会にて

キャンパス ニュース



本部入試課

平成 22 年度入学者数決まる

平成 22 年度新入生の人数は、次のとおりである。

科 類	入学定員	合 格 者 数			入 学 者 数 入 辞 退 者 数	入 学 者 数		留 学 生 の 入 学 者 数		入 学 者 総 数
		一般選抜	特別選考 (第 2 種)	合 計		前 期 等	後 期	国 費 留 学 生 等	特別選考 (第 1 種)	
文科一類	2,963 (2,961)	401 (401)	7 (8)	408 (409)	0 (0)	408 (452)	39 (3)	3 (3)	0 (0)	450 (455)
文科二類		353 (353)	5 (4)	358 (357)	0 (0)	358 (360)	3 (2)	3 (2)	5 (4)	369 (366)
文科三類		479 (479)	3 (4)	482 (483)	0 (1)	482 (482)	1 (8)	7 (8)	1 (1)	491 (491)
理科一類		1,129 (1,129)	4 (3)	1,133 (1,132)	3 (9)	1,130 (1,153)	33 (14)	18 (14)	5 (4)	1,186 (1,171)
理科二類		547 (547)	4 (3)	551 (550)	10 (3)	541 (568)	22 (3)	0 (2)	2 (3)	565 (573)
理科三類		100 (98)	0 (1)	100 (99)	0 (1)	100 (98)		0 (0)	2 (0)	102 (98)
全 科 類		100 (100)			100 (100)	2 (3)				
合 計	3,063 (3,061)	3,109 (3,107)	23 (23)	3,132 (3,130)	15 (17)	3,019 (3,113)	98 (29)	31 (29)	15 (12)	3,163 (3,154)

- (注) 1. () 内は、昨年度を示す。
2. 国費留学生等の人数には、国費留学生の他に政府派遣留学生、日韓共同理工系学部留学生を含む。

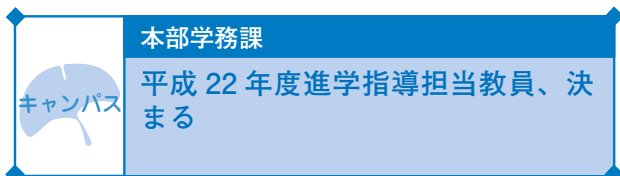
読者投稿写真 No.16

東大より望む虹



居室(理学部1号館)前のテラスから撮った虹の写真です。撮影時は、もう昨夏になりますが(2009年7月27日18:43)、浅野キャンパスおよび上野公園方面を望んだものです。二重虹で、内と外で7色の順番が逆転しているのもよく分かります。

(撮影：大学院理学系研究科 教授 青木秀夫さん)



教養学部（前期課程）から専門分野へ進学しようとする学生に対し、進学に関する諸問題について個人的な指導や相談にあたる今年度の進学指導担当教員は、次のとおりである。

平成 22 年度進学指導担当教員名簿

平成 22 年 4 月現在

学部		職 名	氏 名	連絡先
法	全類	教 授	日 比 野 勤	03-5454-7664
医	医学科	教 授	黒 川 峰 夫	03-5800-9092
	健康総合科学科	教 授	真 田 弘 美	03-5841-3419
工	社会基盤学	准 教 授	石 田 哲 也	03-5841-6102
	建築学	准 教 授	大 月 敏 雄	03-5841-6169
	都市工学	准 教 授	窪 田 垂 矢	03-5841-1845
	機械工学	教 授	金 子 成 彦	03-5841-6429
	機械情報工学			
	航空宇宙工学	教 授	津 江 光 洋	03-5841-6580
	精密工学	教 授	太 田 順	03-5841-4252
	電子情報工学	准 教 授	八 井 崇	03-5841-0416
	電気電子工学	准 教 授	五 島 正 裕	03-5841-6675
	物理工学	教 授	押 山 淳	03-5841-6810
	計数工学	教 授	駒 原 文 保次	03-5841-6941 03-5841-6892
	マテリアル工学	教 授	榎 学	03-5841-7126
	応用化学	准 教 授	組 頭 広 志	03-5841-7192
	化学システム工学	准 教 授	菊 地 隆 司	03-5841-1167
	化学生命工学	教 授	小宮山 眞	03-5841-7206
	システム創成学	准 教 授	定 木 淳	03-5841-7074
文	全学科	准 教 授	唐 澤 かおり	03-5841-3853
理	数学科	准 教 授	坂 井 秀 隆	03-5465-7034
	情報科学科	教 授	辻 井 潤 一	03-5841-4098
	物理学科	教 授	福 山 寛	03-5841-4193
	天文学科	教 授	柴 橋 博 資	03-5841-4256
	地球惑星物理学科	教 授	ゲラー・ロバート	03-5841-4306
	地球惑星環境学科	准 教 授	大 路 樹 生	03-5841-4506
	化学科	教 授	山 内 薫	03-5841-4334
	生物化学科	教 授	坂 野 仁	03-5841-4396
	生物学科	准 教 授	越 田 澄 人	03-5841-4433
	生物学科	准 教 授	野 口 航	03-5841-4476
	生物学科	講 師	井 原 泰 雄	03-5841-4483
生物情報科学科	准 教 授	程 久美子	03-5841-3043	

農	生命化学・工学専修	准教授	永田宏次	03-5841-2279
	生命化学・工学専修	准教授	中村周吾	03-5841-5445
	応用生物学専修	教授	根本圭介	03-5841-2781
	応用生物学専修	准教授	岩田洋佳	03-5841-5069
	森林生物科学専修	教授	富樫一巳	03-5841-5217
	水圏生命科学専修	教授	浅川修一	03-5841-5296
	動物生命システム科学専修	助教	清川泰志	03-5841-8894
	生物素材化学専修	准教授	江前敏晴	03-5841-8199
	緑地生物学専修	准教授	大黒俊哉	03-5841-5049
	森林環境資源科学専修	准教授	大手信人	03-5841-5214
	水圏生産環境科学専修	准教授	山川卓	03-5841-5279
	木質構造科学専修	准教授	信田聡	03-5841-5251
	生物・環境工学専修	准教授	富士原和宏	03-5841-5354
	農業・資源経済学専修	教授	松本武祝	03-5841-5321
	フィールド科学専修	准教授	大黒俊哉	03-5841-5049
	国際開発農学専修	准教授	山川隆	03-5841-7515
	獣医学専修	准教授	堀本泰介	03-5841-5397
経	全学科 (経済学科、経営学科、金融学科)	准教授	大橋弘	03-5841-5511
養	超域文化科学科	教授	一條麻美子	03-5454-4863
	地域文化研究学科	准教授	村松真理子	03-5454-4912
	総合社会科学科	教授	後藤則行	03-5454-6473
	基礎科学科	教授	前田京剛	03-5454-6747
	広域科学科	准教授	蜂巢泉	03-5454-6615
生命・認知科学科	准教授	松田良一	03-5454-6637	
育	総合教育科学科	准教授	橋本鉦市	03-5841-3943
葉	全学科	教授	堅田利明	03-5841-4750



学問をとおしての出会い

山邊昭則

総合文化研究科 特任講師

大学院総合文化研究科・教養学部附属

教養教育高度化機構 科学技術インタープリター部門

第⑦回 公開プレゼンテーション

リユース事業が始まって早8ヶ月、他大学からの問い合わせも増えてまいりました。そこで共通して質問されることが委託業者の選定方法です。通常、こちらで提示した仕様が一番安い金額をつけた業者を採用する契約方法が一般的ですが、リユース事業は前例のない初めての事業です。こちらである程度の仕様を想定はしましたが、世の中にはもっと効果的な方法があるかもしれません、何より今回の事業に深く理解を示し取り組んでもらえる業者でなければなりません。そこで私たちは、広く公募を行い、金額以外に提案内容も評価して決定する方法を採用することにしました。

応募業者は事前に提案書を提出し、後日7名の選定委員の前で15分程度のプレゼンテーションを行います。提案書とプレゼン内容の総合評価により、得点の高い業者に決定です。事前に問い合わせのあった業者は3社でしたが、実際の応募はA社、B社と、2社の一騎打ちとなりました。

いよいよ、プレゼン当日。私たちも初めてとあって、朝からそわそわと落ち着きません。トップバッターは、秋葉原に複数店舗を持つ中古PC販売業者のA社です。近年東証マザーズに上場したA社は、急成長の会社らしく、社長自ら颯爽と現れ、会社説明から始めました。プロジェクターによるBGM付きの説明は、さすが社長だけあって堂々としていて、さながら講演会場にいる雰囲気です。セキュリティ体制の完璧さ、再生技術のノウハウには唸らされましたが、肝心のリユース業務の提案は、1分もかからず終わってしまい、思わず拍子抜けをしてしまいました。さて、お次はOA機器等販売業者のB社です。こちらはいつも現場を回っている担当者によるプレゼンです。いつになく早口で汗びっしょりで説明する姿からは、緊張と熱意がびんびん伝わり、思わず固唾を飲んで見守ります。セキュリティや再生技術はA社に若干劣るものの、B社の大学の研究室に合わせたきめ細かい提案は委員の評価も高かったようです。2社とも甲乙つけがたい提案でしたが、結果、極々僅差でB社一美津野商事(株)に決定!

こうして、今日も美津野商事さんが、PCの回収に、再生にと、学内を元気に走り回っています。(青)

☆4月各部局ご提供PC☆

工学部 22台	人工物工学研究センター 4台	薬学部 4台
農学部 4台	大気海洋研究所 4台	理学部 2台
医学部 2台	新領域創成科学研究科 1台	

以上43台のノートPCは3回目の募集時に利用させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きよろしくお願いたします。

- 問い合わせ先: ノートPCリユースオフィス (本部資産管理部資産課内)
E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
URL: http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/
内線: 22135 (担当 青木・高橋・戸田)

- ノートPC回収先: 美津野商事株式会社システム事業部
E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)
電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

2010年の桜が咲き始める頃、白金キャンパス(医科研)のあの敬愛する先生から内線をいただいた。こちらの新年度の方向性がクリアになり、ご報告を差し上げていたことへのレスポンスである。その先生と私の所属は、いわばそれぞれのキャンパスでの、科学・技術と社会の関係について教育や研究を実施する組織同士といえる。これからもぜひ協力していこうね、という温かい言葉をいただき、その後の話題は、この分野で何か全学的なネットワークができればいいね、という内容へと移っていった。せっかく学内広報の貴重な紙面をいただいたので、そうしたことについて少し触れてみたいと思う。近年、東大のなかの様々な学部・研究科で、科学や技術に関する望ましいコミュニケーションを目指す活動や、必要に応じて研究のアウトリーチを担当する部署が増えている。学術的なアプローチから華やかな広報に至るまで、方法と役割は文字どおり多彩である。そうしたなか、私たちは、大学院生を対象とし、将来的に学部教育とも合流して、学術に根ざした教育を実施する点にひとつの特徴を持つ。そのため、上記の皆さんの活動と重なる要素は多く、様々な催しでお会いすることもあれば、私信をやり取りしたり、一緒にご飯を食べに行ったりする間柄であることも少なくない。とはいえ、その一方で、東大という同じ屋根の下で暮らす住民同士にしては、連携の在り方がやや個人的な知己に依る傾向があり、公的な組織同士としてのお付き合いの機会は、恵まれた環境の割には十分生かされていないのでは、という感覚をその先生と共有したのである。実は似たような感想を抱いている先生方は少なくないと感じている。友情などの私的な文脈に基づいた協働も好きであるが、それはそれとして、もし連携を良い意味で標準化させる公的なネットワークが形成できれば、人の交流から、事業や教材の共有、学問上の発見に至るまで、豊かな効果をもたらされる可能性は高い。しかもそれは運営に種々の負荷がかかる実体的な何かである必要は必ずしもなく、まずは組織図の概念上のものであっても、何か有意義な結びつきのきっかけとなるだろう。そういうわけで、もし教員のこうした意識が次第に現実へ反映されていくとすれば、その教育へ参加するチャンスのある学生の皆さんもまた、これまで以上に、本郷、駒場、弥生、柏、白金、その他の様々なキャンパスや学業拠点から、積極的な関心を向けていただきたいと考えている。自分と異なる専門を持つ仲間たちとの出会いは、主専攻では得難い気づきを与えてくれるし、楽しく尊い。かくいう筆者も、今の職務をとおして学問の面でも人の面でも非常に豊かな出会いに恵まれてきた。慌しい仕事の束の間に、学術的な交流と称して学内外の先生や学生をお招きし、実際のところは持ち寄った美味しいケーキやコーヒーをご一緒する楽しい時間なのであるが、そうした日常の余白のようなひとときは今後大事にしたい。これからも内外のご縁を大切にしていきたいと考えている。

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共にご紹介していきます。

活動報告

ワシントン大学医学部長 センター来訪

新年度早々の4月2日（金）、政策ビジョン研究センターは、海外からゲストを迎えました。今回、森田朗センター長を訪問されたのは、ワシントン大学医学部長、ラリー・J・シャピロ教授（Larry J. Shapiro）です。ワシントン大学医学部と言えば、全米の医学部の中で常にトップ3の地位にあることで有名です。

東大担当の親善大使

ラリー・J・シャピロ教授（M.D., Distinguished Professor Executive Vice Chancellor for Medical Affairs and Dean, Washington University School of Medicine）は、遺伝学、分子生物学、生化学の研究者として著名な方で、医学部長に就任される前にはカリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部で小児科学講座を担当していました。現在は、医学部長兼ワシントン大学の東大担当親善大使を務められています。教授はアメリカ科学アカデミー医学部（National Academy of Sciences' Institute of Medicine）の会員の1人であり、他いくつかの学会の学会長を務められています。

少子高齢化を見据えて

今回の訪問では、東大担当親善大使就任のご挨拶、ワシントン大学の奨学金プログラム（McDonnell International Scholars



（写真左から）医学部附属病院副院長 五十嵐隆教授、政策ビジョン研究センター佐藤 智晶 特任助教、同 森田朗センター長、ワシントン大学医学部長 ラリー・J・シャピロ教授、医学部附属病院長 武谷雄二教授

Academy Program）の説明、そして学術研究交流の可能性について話し合われました。

少子高齢化社会を見据えた医療政策研究の重要性なども議論されました。アメリカでは、医療保険改革の関連法案が連邦議会でも可決成立し、医療へのアクセス拡大に道が開かれることになったのですが、これは医療のコストと質の問題を解決するというより、さらに大きく浮かび上がらせるものです。他方、わが国でも少子高齢化が急激に進むなかで、どうやって医療へのアクセス、医療のコスト、そして医療の質のバランスを実現するのが問われています。クリニカルデータを利用して医療の有効性を比較する研究（comparative effectiveness research）等は、課題解決の第一歩として極めて大きな役割を果たすものと考えられます。

ちなみに、ワシントン大学医学部ではテーラーメイド医療¹をはじめとする高齢化に関連する研究が、ワシントン大学医療政策センター（Center for Health Policy）では、医学者を中心として医療経済の研究が進められています。

テーラーメイド医療

Tailor-made medicine

テーラーメイド医療は、パーソナライズド・メディスン（Personalized Medicine）と呼ばれることがより一般的で、患者個人の分子・遺伝情報の違いを把握し、疾病の原因や病態を形成する情報を体系的に利用して、患者の治療効果が最大に、他方で副作用が最小になるような予防または治療のことをいう。

<http://pari.u-tokyo.ac.jp/unit/words.html>

（当センター HP 政策関連用語集より）

科学技術ガバナンス研究会

課題解決型の 戦略的イノベーション

国の「新成長戦略」では、課題解決型の戦略的イノベーションを支援していく姿勢を、明確に打ち出されています。そして、科学技術は成長を支える、プラットフォームとしての役割を求められています。総合科学技術会議の議論においても、こうした姿勢が明確に打ち出されており、そのためのツールの1つとして、社会と科学技術イノベーションとの関係深化に向け、テクノロジーアセスメント（技術の社会影響評価）等に基づいた取り組みを推進するとしています。

このような状況においては、テクノロジーアセスメントや科学技術戦略本部といった、社会と科学技術の媒介となる制度・組織のあり方につ

いて議論を深めることが重要です。また、科学技術の現場で社会との関係で何が問題となっているのかを、分野横断的に具体的にマッピングし、科学技術に関わる多様な社会的価値とそのガバナンスのあり方について、包括的な知見と視点を得ることも重要と思われます。

そのため当センターは、「科学技術ガバナンス研究会」と題した連続ヒアリング研究会を開催しています。各分野で活躍されている研究者や政策実務家の皆様をお招きして、自由かつ幅広くご意見を伺うと同時に、私ども、政策ビジョン研究センター 技術ガバナンス研究ユニット及び、公共政策大学院 I2TA プロジェクト等にかかわる政策研究者との議論も行っています。

各回の開催報告（講師による問題提起および、討議における主要な論点）は随時当センター HP 上にて公開しております。是非ご覧ください。

連続ヒアリング企画 開催日程および講師

- 【第1回】4月21日（水）13:00～14:30
坂井 修一教授（情報理工学系研究科）
- 【第2回】4月23日（金）15:00～16:30
中須賀 真一教授（工学系研究科）
- 【第3回】5月11日（火）10:00～12:00
五神 真教授（工学系研究科）
- 【第4回】5月14日（金）16:00～17:30
片岡 一則 教授（工学系研究科 / 医学系研究科）
- 【第5回】5月18日（火）10:30～12:00
渋谷 健司 教授（医学系研究科）
- 【第6回】5月21日（金）16:00～18:00
下山 勲 教授（情報理工学系研究科）
- 【第7回】5月24日（月）10:00～11:30
柳瀬 唯夫 氏（経済産業省産業再生課 課長）
- 【第8回】5月25日（火）10:00～11:30
豊島 聡 氏（独立行政法人医薬品医療機器総合機構 シニアアドバイザー）
- 【第9回】5月31日（月）09:30～11:00
山地 憲治 氏（財団法人地球環境産業技術研究機構 理事・研究所長）

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>

産学連携本部

影山本部長・山城副本部長

知の還元から知の共創へ (後編)

みなさまは「産学連携本部」と聞いて、何を思い浮かべるでしょうか？ 共同研究、知的財産、大学発ベンチャー支援など。前回に引き続き、影山本部長と山城副本部長に、産学連携本部の役割や活動について話していただきました。

—産学連携本部における知的財産管理の役割—

山城 2004年に大学が法人化した際、知的財産も大学帰属になり、知的財産マネジメントのための取り組みが各大学で行われてきました。東京大学の場合は、100%子会社の(株)東京大学TL0が知的財産のライセンスを担っており、知的財産部と一体になって動いています。良い体制で知的財産マネジメントが行われていて、イノベーションにつながりやすいと思います。

影山 特許などの知的財産は大学にとって大切な財産です。別の見方をすると、大学の研究成果の特許等の移転可能な形にして社会に還元することは大学の使命でもあります。現実的な問題として、どの発明を大学帰属とするか、ライセンスをどのように行うか、知的財産を維持管理するコストをどのように考えるか、今そのような知的財産マネジメントの仕組みが大学に問われているのだと思います。

山城 知的財産の管理はリーガルな部分のチェックが必要になってきます。知的財産部には、数多くの相談が寄せられますが、各部署の判断を進めることができる雛型通りの案件も多いと聞いています。頼りにされている反面、職員に負担がかかっています。知的財産マネジメントの業務が、国際的な案件も含めて更に増大する見込みの一方、本部組織を量的に拡大していくことは難しいと思われまます。したがって、産学連携本部で知的財産に係る知識を身につけた職員の方々が、各部署に異動して知的財産管理業務を担うという形を積み重ねることにより、一般的な案件は極力部局で処理する一方、高度・複雑な案件は産学連携本部で担うといった役割分担がより良く行われるようになることが必要だと思います。

影山 そうですね。大学の中に知的財産のスペシャリストを育てるために、学内の人材育成も大切だと思います。そのためには、産学連携本部の活動を部局の皆様にも理解していただくことが重要になります。産学連携本部の活動を学内外にわかりやすく情報発信すること、部局の様々なご要望に答えていくことが大切だと思います。



【山城宗久副本部長】東京大学工学部卒業。イェール大学大学院国際関係論学科修了。通商産業省に入省。中小企業庁創業連携推進課長等を経て、2009年8月より東京大学産学連携本部へ出向。

—大学創出技術の事業化と大学発ベンチャー—

影山 大学の研究成果の社会還元の中でも、大学創出技術の製品化や事業化は、大学における様々な産学連携活動の中でも最もダイナミックで社会的インパクトの大きい活動です。産学連携本部は事業化推進部の活動を通して、(株)東京大学TL0と(株)東京大学エッジキャピタルと緊密に連携しながら、大学発ベンチャーの創出などの事業化を強力に推進しています。大学発ベンチャーは、研究成果が直接社会のために役立つことを示すものでもあり、苦しいこともありますが夢のある事業です。若い人たちにもぜひチャレンジしてもらいたいと思います。

山城 私自身、経済産業省でベンチャー振興を担当していた経験から申し上げますと、国としてベンチャーを支援する政策は、やり尽くされてしまったように感じます。残された課題は、それらを使いこなせるプレイヤーをどう教育し、育てていくかです。大学にはそういう役割が期待されていると思います。「東京大学アントレプレナー道場」による起業教育や「東京大学アントレプレナープラザ」等を活用したインキュベーション事業は重要な意義を持っています。また、(株)東京大学エッジキャピタルは、シーズの段階からハンズオンで育成し、昨年は設立当初から支援してきたバイオベンチャーが成功裡に上場したことをはじめとして、実績を挙げてきています。日本経済を活性化させ、日本がリーディングカンタリーの一つであり続けるためには、アントレプレナー精神をもった人たちと、こういう優れたベンチャーキャピタルが増えていくことが必要だと思います。

—TLF (テクノロジー・リエゾン・フェロー) 研修制度—

山城 最後に、東京大学ならではのユニークな制度として、TLF研修制度(自治体の職員を対象とした、産学官連携推進のための専門家育成プログラム)に触れたいと思います。今年で11年目を迎えますが、北は青森県から南は沖縄県まで全国の自治体から派遣され、総派遣人数は65名になります。2年前にはこの研修制度の全修了生と本学教員による「東京大学地域振興研究会」も発足しました。私はこの研修制度は地域振興に役立つものだと思っており、研修生の方々が地元に戻った後、研修で得た知識やネットワークを生かしていただくことを期待しています。

影山 TLF研修では、日本中から集められた方々に、東京大学ならではの様々な産学連携活動を経験していただいています。TLF研修を受けられた方々が地元に戻って産学連携という種をまき、芽が出て大きく育ち、実がたわわに実るまでは長い時間が必要です。それを温かく見守っていきたいと思います。



【影山和郎本部長】東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(工学博士)。通商産業省工業技術院機械技術研究所を経て、東京大学大学院工学系研究科助教、教授(現職)に。2009年4月より産学連携本部長。

連絡先：産学連携本部 (本部産学連携課)
 電話：内線22857 (外線03-5841-2857)
 WEBサイト：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUOCR

検索

DUOCR
 Division of University Corporate Relations
 The University of Tokyo

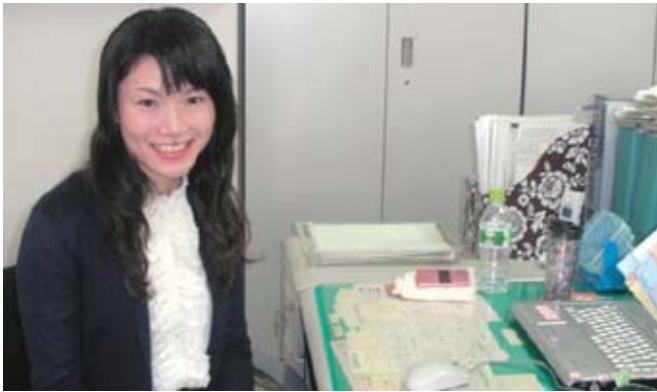
ワタシのオシゴト / 第51回

Rings around the UT

大学院新領域創成科学研究科研究交流係

進藤文子さん

AMIGO !



柏キャンパス在任も5年目に突入！

産休・育休を経て新領域に着任したのが、今から4年前です。私の所属する研究交流係は、主に新領域の受託・共同研究、科研費、寄附金、外国人研究員関係等の受入・契約～実績報告までを扱い、その中で私は、主に科研費・GCOE等を担当しております。

係で扱う外部資金は、年々増加傾向にあり、仕事量も増大する中、係で協力して効率的に仕事をこなすには、情報の共有化が重要だと実感します。昨年からの係では、担



毎年恒例、親子で出場のピアノの発表会♪

当する業務の事務手続き等をまとめた「情報サイト」を立ち上げました。これにより、係の業務の全体像が明確になり、研究室からの問い合わせにも、主担当以外の者が対応できるようになり、また、同サイトを閲覧いただくことで問い合わせ自体も減り、その分、業務に集中できるようになったと感じています。

プライベートでは、4歳の娘が昨年囲碁を覚え、もうすぐ3級になります。近日、親子で梅沢由香里プロ主催のイベント『IGO AMIGO』に参加予定です♪

得意ワザ：自転車早漕ぎ、ビール党、囲碁（入門編です）、ピアノ演奏

自分の性格：楽天的なO型

次回執筆者のご指名：市川 令（ツカサ）さん

次回執筆者との関係：病院採用→文科→東大復帰と同じ荒波にもまれた戦士？！

次回執筆者の紹介：笑いの絶えない、なごみキャラです☆

ケータイからみた東大
～東大ナビ通信～

東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET！



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
 - イベント掲載フォームから送信！
 - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！

- 内線；27823
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟403号室



特別寄稿

英語のブートキャンプから世界へ：東京大学の国際化を考える

ロバート・ゲラー
(大学院理学系研究科・理学部 教授)

最近、東京大学では、英語による講義（特に大学院）の可能性が議論されている。さらに、「G 30」プログラムの一環として、すべての講義を英語で行う新しい学部コースを設置することが内定され、来年度中には学生募集が行われると聞く。

英語で教育を行うことは確かに「国際化」そのものである。ただし、これはもちろん日本文化としての日本語を軽視するものでは全くない。英語は、現時点でのリングフランカ、情報伝達の共通媒体であり、効率的な媒体を持つことで情報発信がより容易になるという意味である。この点で、諸外国は日本より遥かに進んでいる。例えば、チューリッヒのスイス連邦工科大学（ETH）の場合、院生の大多数及び多くの教員はスイス国籍を有していないが、全ての大学院講義が現地語（ドイツ語）ではなく、英語で行われ、事務スタッフや技術職員さえも皆流暢な英語を話す、まさに世界に開かれた知的環境であるから可能であるともいえよう。これは極端な例であるが、東大でも大学院教育の英語化を実施することができれば海外から数多くの優秀な院生も、また教員も集められる可能性は高い（現在、日本語が少なくとも主要な障壁の一つであることは間違いない）。そうなれば、東京大学の教育・研究もさらにレベルアップするであろう。是非、前向きに検討すべきといたいだが、その前に避けて通れない課題、すなわち、「東大生の英語力」の問題がある。

現在、私の見るところ、多くの日本人学生にとって、英語による講義をフォローすることは至難の技ではないだろうか。この私見が正しいとすれば、英語で講義を行うことの意味はどこにあるのだろうか。英語力を評価するにはさまざまな手法がある。TOEFL試験はその一つで、国際的にも広く使われている。TOEFLの紙媒体試験の点数は最低310点から最大677点で、アメリカの一流大学の博士課程に入学しようとするればTOEFLスコア600点が合格ラインの目処である。これはあくまで、辛うじて英語による講義をフォローでき、多少なりとも議論に参加することができるというレベルであり、正直にいうと、もっと高いスコアが望ましい。

最近私が所属している専攻ではTOEFLを大学院入試の一環として使用している。残念ながら、ほとんどの博士課程入試合格者のスコアは600点に達することなく、550点以上を達成する者でさえ、全体の約4分の1程度にとどまっている。つまり、「英語」に限れば、現役院生のトップのみが、アメリカの一流大学の博士課程に「滑り込みセーフ」で合格、他のほとんどは不合格ということになる。他専攻・他研究科の教員に聞いてみると、この状況は他部局でも同様のようである。

日本のほとんどの学生は少なくとも中学校、高校、大学1・2年の、合計8年にわたる英語教育を受ける。にもかかわらず、博士課程進学時点のTOEFLが、かくも低いのはなぜだろうか。この疑問に答えるのは容易ではない。我々の専攻（地球惑星科学専攻）では、数年前から「科学英語演習」の科目を新設した。当初は選択科目として始まったが、3年前から、博士課程の1年生には「原則必修」としている。講義は、夏冬学期、週2回、計52回（計78時間）。講義の目的は必ずしもTOEFLスコアを向上させることなく、科学者として必要不可欠となる、一般的な英語力（話す、聞くなど）を強化することにある。まじめに講義に出席して、宿題もこなささえすれば、TOEFLの再試験において、以前スコアの低かった学生で平均約40点アップ、既によかった学生でも約25点アップといううめざましい結果が得られている。

根本的な問題は日本における英語教育そのものにあるが、東京大学として、今、何ができるだろうか？ここで一つ提案したい。夏休み中に、学部でも大学院でも、東大生は全員「英語ブートキャンプ」を受けること。どこかに泊り込み、朝から晩まで4～6週間、英語を集中的に学ぶ。この「英語漬け」の特訓で、学生の英語力が抜群にアップするであろうことは間違いない。

この提案を実現するためには、財源として相当なものを用意しなければならないだろう。しかし、東京大学が世界の大学と伍して、それなりのポジションを占めたいと思うのであれば、安いものである。逆に、この程度の大改革を実施しなければ、東京大学の国際化は絵に描いた餅に過ぎなくなってしまうであろう。

INFORMATION

募集

募集

国際本部 AGS 推進室

平成 22 年度 東京大学 AGS 研究会 研究課題の募集

東京大学、マサチューセッツ工科大学 (MIT)、スイス連邦工科大学 (ETH)、チャルマーズ工科大学による AGS (Alliance for Global Sustainability) は地球環境の保全という制約条件下で持続的な発展を求めて現実的な方策等の提言を行う共同研究を推進している国際パートナーシップです。スタートから 14 年を経過し、2006 年より第 3 期活動を進めています。第 3 期においては各大学が地域の活動により一層力を入れるという方針のもと、東京大学 AGS 研究会ではこれまで以上にアジアでの活動を推進し、取り分け中国、韓国、東南アジア諸国、インドのサステナビリティに関わる研究・取り組みを強化し、これらの国を代表する大学・研究機関との連携を推進しています。

このたび東京大学 AGS 研究会では、昨年と同様に Full Project と Seed Project の 2 種類について平成 22 年度の研究課題を募集いたします。アジアを視点に置きながら、Full Project については、AGS の重点分野である水、食糧、エネルギー、都市の未来、Mobility、リスクマネジメントなどに関する研究課題の他に、高齢化社会・持続可能性を支える文化の多様性や持続可能な社会と Gender の役割などの新しい研究課題についても研究基金を配分いたします。また、将来重要性が期待される Seed 的な研究課題 Seed Project についても研究基金を用意いたします。特に今まで応募されていない新しい方の応募、新しいアイデアに基づいた研究課題の提案をお待ちしています。

1. 研究課題応募に際しての留意点

- ① サステナビリティに関する研究プロジェクトとして採択されることを目指す研究であること。
- ② Full Project は学際性、国際性、社会連携 (注 1) のいずれか一つ以上を満たすものであること。
- ③ 研究課題用の応募用紙を用いる (項目 2 を参照)。
- ④ 一件当たり Full Project は年間 150 万円以内、Seed Project は 40 万円以内の研究助成基金を配分する予定。
- ⑤ 研究代表者は本学教員であることが必須ですが、共同研究者として研究員、大学院生が参画できます。助成基金の配賦は秋以降となり、実質上研究期間が平成 23 年度にかかりますので、来年 3 月に退職される教員の方は研究代表者となられることをご遠慮ください。
- ⑥ 海外で実施される Work Shop など AGS が関与する会議で重要と認められた会議に参加する場合の旅費は別途予算として計上準備する予定ですので、本年度の研究課題申請の際には上記会議への参加費用の計上は必要ありません。
- ⑦ 採択されました研究課題の研究代表者の方には以下の義務を負っていただきます。いずれもその時期になりましたらお願いの連絡をいたします。
 - ・ 2011 年 12 月ごろに開催する中間報告会での口頭発表 (15 分間程度)
 - ・ 2012 年 6 月ごろまでに 5 ~ 6 ページの報告書提出
 - ・ 会計報告

(注 1) 社会連携：技術や制度の社会における実践・普及を念頭に置き、研究プロジェクトにおいて社会の様々な関係者と連携すること。

2. 応募ご希望の方は応募用紙をお送りいたしますので下記まで連絡をください。
3. 応募用紙にご記入の上、7 月 2 日 (金) までに e-mail でご提出をお願いいたします。

応募用紙依頼、課題申請書の提出、問合せ先
浅尾 修一郎 (あさお しゅういちろう)
東京大学 AGS 推進室
内線：21548
E-mail: asao@ir3s.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

お知らせ

情報基盤センター

各キャンパスで開催！ 専門分野のデータベース講習会のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

6月は、各専門分野のデータベースについて、実習形式の講習を行います。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

●申込方法：

予約優先です。先着順ですので、お早めに、下記のサイトからお申し込みください。席に余裕があれば、当日の参加もOK！

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お申込ページはガコス 講習会で検索できます。

●会場：

【本郷】 総合図書館 1階 講習会コーナー 定員 12名

【駒場】 駒場図書館 地下1階 会議室 定員 24名

※ 6/3、6/25のみ

駒場図書館カウンター前に集合

【柏】 柏図書館 1階

6/4 (金)：セミナー室2 定員 8名 (備付 PC 使用)

6/15 (火)：コンファレンスルーム 定員 24名

希望者先着 8名まで備付 PC 利用可

持込 PC 利用可 (無線 LAN 利用可能なもの)

6/22 (火)：ラーニングサポートサービス 定員 26名

希望者先着 14名まで備付 PC 利用可

持込 PC 利用可 (無線 LAN 利用可能なもの)

6/23 (水)：コンファレンスルーム 定員 24名

希望者先着 8名まで備付 PC 利用可

持込 PC 利用可 (無線 LAN 利用可能なもの)

6/30 (水)：ラーニングサポートサービス 定員 26名

希望者先着 14名まで備付 PC 利用可

持込 PC 利用可 (無線 LAN 利用可能なもの)

【数理研】 数理科学研究科棟 2階 計算機室 定員 20名

※ 6/2、6/3、6/16のみ

【農図】 農学生命科学図書館 本館 3階 PC 端末室

定員 12名

※ 6/18、6/24のみ

●参加費：無料

●コース内容とスケジュール：

■ eol (有価証券報告書、企業情報)

6/2 (水) 15:00-16:30 【会場：本郷】

■ Business Source Complete (経済・経営、ビジネス)

6/10 (木) 15:00-16:00 【会場：本郷】

■ MathSciNet (数学分野) (※)

6/2 (水) 15:00-16:00 【会場：数理研】

6/3 (木) 15:00-16:00 【会場：数理研】

※理学部数学科、数理科学研究科所属者優先

■ Zentrablatt Math (数学分野) (※)

6/16 (水) 15:00-16:00 【会場：数理研】

※理学部数学科、数理科学研究科所属者優先

■ SciFinder Scholar (化学・薬学分野)

6/4 (金) 13:00-14:30 【会場：柏】

6/16 (水) 15:00-16:30 【会場：本郷】

■ Lexis.com (世界各国の法令・判例)

6/11 (金) 13:30-15:00 【会場：本郷】

■ LexisNexis Academic (世界の新聞、企業情報)

6/11 (金) 15:15-16:15 【会場：本郷】

■ PubMed (医学) + RefWorks (文献管理ツール)

6/15 (火) 15:00-16:30 【会場：柏】

■ RefWorks (文献管理ツール)

6/3 (木) 13:00-14:00 【会場：駒場】

6/29 (火) 16:00-17:00 【会場：本郷】

■ OECD iLibrary (OECD 統計)

6/17 (木) 15:00-16:00 【会場：本郷】

■ BIOSIS Previews (生命科学分野)

6/22 (火) 15:00-16:00 【会場：柏】

■ Web of Science (全分野) +

EndNote Web (文献管理ツール)

6/8 (火) 16:00-17:30 【会場：本郷】

6/23 (水) 13:30-15:00 【会場：柏】

6/25 (金) 13:00-14:30 【会場：駒場】 自然科学向け

6/25 (金) 14:40-16:10 【会場：駒場】 社会科学向け

■ Web of Science 応用編

6/30 (水) 15:00-16:00 【会場：柏】

■ 国内の新聞記事を探すには？

6/10 (木) 12:10-12:40 【会場：本郷】

*このコースは予約不要です。

■電子ジャーナルで論文を入手

6/17 (木) 12:10-12:40【会場：本郷】

*このコースは予約不要です。

■レポート&論文作成対策講習会

～これだけは押さえておきたいポイント教えます～

(基本的な文献の探し方 + 文献管理ツール)

6/18 (金) 16:30-18:00【会場：農函】

6/24 (木) 16:30-18:00【会場：農函】

*このコースは予約不要です。

●ご希望の内容で出張講習します。

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。(無料)

授業の1コマや、ゼミなどにご活用ください。

ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記問合せ先までご連絡ください。

詳細は下記サイトをご参照ください。

(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

●データベースや講習会の情報をお届けします。

Litetopi メールマガジン発信中。

当係発行の Litetopi (リテトピ) メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



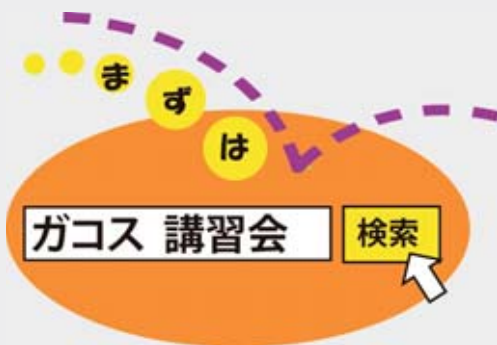
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>



お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

第38回東京大学農学部公開セミナーのお知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部では、以下の要領でセミナーを開催します。無料で、どなたでも参加できます。多くの方のご来場をお待ちしております。

第38回 東京大学農学部公開セミナー

『動物の行動を科学する』

「カラスの特異な食習性と地域食文化」

生圏システム学専攻 樋口 広芳 教授

「蛾のプロポーズ

— 匂いと音によるコミュニケーション —」

生産・環境生物学専攻 石川 幸男 教授

「マツノマダラカミキリ成虫の行動と松枯れ」

森林科学専攻 富樫 一巳 教授

「悩めるペットの行動治療」

応用動物科学専攻 武内 ゆかり 准教授

日 時：6月19日(土) 13:30～16:30

場 所：東京大学弥生講堂・一条ホール

東京都文京区弥生1-1-1

地下鉄南北線「東大前」下車 徒歩1分

地下鉄千代田線「根津」下車 徒歩7分

対 象：一般(どなたでも参加できます)

定 員：300名(当日先着順、事前登録不要)

参 加 費：無料

問合せ先：東京大学農学系総務課 総務チーム

総務・広報情報担当

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1

電話：03-5841-5484 / 8179

mail: koho@ofc.a.u-tokyo.ac.jp

※ 受講証を発行いたします。

ご希望の方は、120円切手をご持参の上、

当日受付でお申込ください。

主 催：大学院農学生命科学研究科・農学部

共 催：(財)農学会

お知らせ

海洋アライアンス

海洋アライアンスシンポジウム 「第5回 東京大学の海研究 —地球システム としての海—」のご案内

海洋アライアンス（機構長：浦 環）の実施するシンポジウムをご案内します。本年度で5回目の開催となる海洋アライアンスシンポジウムですが、例年300名前後の方々に参加されております。毎回、盛りだくさんの内容でご好評を得ております。今回は海洋学際教育プログラムの受講生による、海外での活動についての発表が加わり、さらに魅力的な内容となっております。文理の壁を越え、海に関心のある皆様、奮ってご参加ください。

海洋アライアンス・シンポジウム
第5回東京大学の海研究
【地球システムとしての海】

日時：7月12日（月）
10：00～17：00（9時30分から受付開始）
場所：小柴ホール（本郷キャンパス・理学部1号館）
（懇親会は山上会館地階）
参加費：無料（懇親会費3000円程度を予定）

プログラム：

○企画の趣旨

副機構長 木暮一啓（大気海洋研究所）

—大気から深海までを探る—

○気候システムにおける海洋

渡部雅浩（大気海洋研究所）

○深海の雲と微生物

砂村倫成（理学系研究科）

○耳石から魚の生活史を探る

黒木真理（総合研究博物館）

—海を知る技術—

○海洋環境モニタリングのための新技術開発

福場辰洋（生産技術研究所）

○海洋エネルギーの利用実用化にむけて

高木建（新領域創成科学研究科）

—世界の海を知るために—

○PEMSEA Youth Forum 報告

持留宗一郎（公共政策大学院）

高砂友里子（学際情報学府）

神山龍太郎（農学生命科学研究科）

○国連海洋法条約における海洋科学調査とは何か

許 淑娟（公共政策大学院）

○「うみあるき」ICTプラットフォーム

松浦正浩（公共政策大学院）

○挨拶

機構長 浦 環（生産技術研究所）

*最新のプログラムは海洋アライアンスホームページで
随時更新いたしますので、ご参照ください。

*参加申し込み方法：

海洋アライアンスホームページから登録してください。

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp>

主催：海洋アライアンス

代表推進者組織：理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、新領域創成科学研究科、公共政策大学院、総合文化研究科、地震研究所、東洋文化研究所、生産技術研究所、史料編纂所、大気海洋研究所、アジア生物資源環境研究センター（2010年4月1日現在）

お問い合わせ：

海洋アライアンス事務局 野村英明（大気海洋研究所）

E-mail: office@oa.u-tokyo.ac.jp

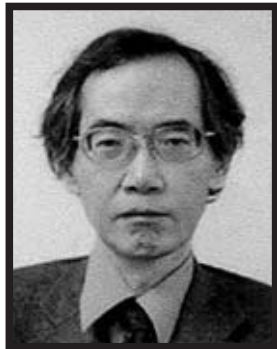
TEL/FAX：04-7136-6417

高橋進教授

3月2日、法学政治学研究科の高橋進教授が亡くなりました。享年61歳でした。

高橋進教授は、1949年（昭和24年）1月、宮城県に生まれ、1972年3月に東京大学法学部第2類を卒業後、ただちにヨーロッパ外交史専攻の助手として同学部に採用されました。1975年（昭和50年）8月に東京大学法学部助教授に就任、1986年3月に「ヨーロッパ外交史」講座担当の教授に昇任。以来、担当科目は「国際政治史」と名を変えましたが、一貫してドイツを中心とするヨーロッパの内政と国際関係の研究・教育にあたられ、学界において押しも押されぬ地位を築かれました。

高橋教授は学内行政にも多大な貢献をしました。法学部においては、評議員・副研究科長として学部長・研究科長を補佐し、2003年から2007年には「東京大学21世紀COEプログラム」の法学部における拠点リーダーの大任を果たされました。全学行政における活躍もこれに劣らず目覚しく、東京大学の史料保存やキャンパス計画に長年携わったほか、広報委員長を2期2年、そして総合研究博物館長を3期5年にわたり務め、また逝去されるまで東京大学生協同組合理事



長の任にあたられました。

高橋教授の学外活動としては、第1に、新聞・雑誌等での言論活動、第2に、現実の政治活動への理論的支援、第3に外国の研究者との交流があります。第1の論壇活動においては、世界と日本のその時々々の政治問題に理論的パースペクティブを与える論文を発表し、また書評・論壇時評を通じて、世論の動向に影響を与えられました。第2の活動領域においては、地方自治や市民運動に特に強く関与されましたが、日本の政党政治の刷新にも終生意欲を燃やし続けておられました。第3の、外国との交流においては、多くの国際学会に参加されたほか、ドイツやイギリスの研究者との交流に多大な貢献をなされました。

高橋教授の学問の特色は、まず、緻密な実証性にあります。歴史資料に対する愛着は、学内行政職務で氏が最も気に入っておられ、最も長期に務められたのが、東京大学の史料保存に関する委員会であったことにも現れております。それと同時に、高橋教授の研究・言論は政治学理論への強い関心と広い知識に裏打ちされてきました。そして、研究における問題設定は、世界と日本の現実をなんとか改善したいという意識に由来していました。最後に遺された編著の題名が『政権交代と民主主義』であったことは、高橋進教授の学問人生を締めくくるにふさわしいものであったと言えます。

（大学院法学政治学研究科・法学部）

佐田登志夫名誉教授

佐田登志夫先生は、病氣療養中のところ、去る4月13日に逝去されました。享年84才でした。

先生は、大正15年に東京で誕生、第一高等学校を経て、昭和23年に東京大学第二工学部精密工学科を卒業されました。その後、理化学研究所、マサチューセッツ工科大学、カーネギー工科大学を経て、昭和40年に東京大学工学部教授に就任されました。昭和61年に東京大学を定年退官後は、電気通信大学教授、理化学研究所副理事長、豊田工業大学副学長、(株)コンボン研究所所長、理化学研究所バイオミメティックコントロール研究センター長などを歴任され、平成17年まで、現役の研究者として活躍されました。

佐田先生の専門は生産加工学です。機械磨耗、切削加工、研削加工、工作機械、フレキシブル生産システムなど広い分野で独創的な研究を行いました。またその成果は、工作機械メーカーや自動車メーカーに導入され、生産設備の高精度化と自動化に直接結びつきました。さらにコンピュータメーカーと機械メーカーからなる統合化設計生産システムのコンソーシアムを組織するなど、我が国のものづくりをリードされました。これらは、1970年代、80年代の第1次、2次フレキシブル生産システムブームを引き起こし、日本の生産技術を世界トップに引き上げる原動力となりました。学会においては、精密工学会、型技術協会、CIRP（国際



生産加工アカデミー) など生産関連の主要学協会の会長を歴任されました。これらの業績により、平成2年に紫綬褒章、平成3年にシュレージンガー賞、平成8年に日本学士院賞、平成12年に勲三等旭日中綬章を受賞されました。

先生の主な研究には、基礎研究として、機械磨耗のなじみ現象、切削におけるせん断力と加工誤差、研削における砥粒脱落機構、工作機械の熱変形誤差などの解明があり、それらの応用として、工作機械の適応制御、故障の自動検出、製造ラインの無人運転などの実用化があります。さらに、穂坂衛東大名誉教授らが開発した3次元幾何モデルを生産に応用し、設計データにより工作機械・ロボット・3次元測定機の制御命令を生成し、加工・組み立て・検査をすべて自動化した統合化設計生産システムを試作されました。いずれも、生産現場の課題を理論的、実証的に解決するものでした。

教育面では、多数の技術者、研究者を育成されました。研究課題を自ら想起し、学生や若手に対して日夜厳密な指導を行い、一方論文発表においては、すべて学生を筆頭者、自らは最後としました。これは当時は当たり前でなく、先生の率いる研究室員は奮起しました。また、毎年7月に御自宅で行われた「七夕会」には、100人近い卒業生と家族が集まりました。先生の東大在任21年間の研究室は、大学教員約30人、企業の設計・生産技術者約90人を輩出しました。

学生や若手研究者の成長を心から喜ばれ、大きな心で常に暖かな励ましを送って下さった先生が逝去されたことは哀惜の念に堪えません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(生産技術研究所)

鈴木絃一名誉教授

鈴木絃一先生は、4月20日ご病気のため東大病院でご逝去されました。享年71歳でした。

先生は昭和37年3月本学理学部生物化学科をご卒業後、同大学院化学系研究科生物化学専門課程（現理学系研究科）に進学され、昭和42年3月に理学博士の学位を取得されました。その後、日本学術振興会奨励研究員を経て、昭和43年7月より本学農学部農芸化学科酵素学研究室に助手として勤められました。その間、昭和44年から2年間、英国MRC分子生物学研究所に留学され、ノーベル賞受賞者であるF. サンガー博士とJ. I. ハリス博士の下で研鑽を積まれました。昭和50年6月に本学医学部第二生化学教室の助教授となられ、さらに昭和58年5月には東京都臨床医学総合研究所に遺伝情報部長として迎えられました。平成3年9月に本学応用微生物研究所の教授にご就任になり、平成5年4月に研究所の改組に伴い分子細胞生物学研究所教授・生体超高分子研究分野主任となられ、平成12年3月に停年退官されました。この間、平成9年4月から平成11年3月まで分子細胞生物学研究所の所長として研究所の発展にご尽力されました。平成12年5月には本学名誉教授となられました。ご退官後は、東京都老人総合研究所と東レ株式会社先端融合研究所の所長を歴任されました。



先生のご研究の成果は多岐にわたっておりますが、一貫してタンパク質の構造と機能について、常に最先端の技術・手法を駆使してご研究を進めて来られました。なかでも、カルシウム依存性中性プロテアーゼであるカルパインの一次構造を決定するとともにその高次構造をX線解析で明らかにされ、さらにはその活性化機構並びに生理機能・病態との相関に関するご研究において常に世界をリードして来られたことは特筆されるべきご業績です。

先生は学生の教育と後進の育成にも力を注いで来られ、ご薫陶を受けた人材は各地で活躍しております。さらに、日本生化学会会長として学会の発展のためにご尽力されるとともに、文部省・日本学術振興会の専門委員としてわが国の学術の発展と推進において重責を担って来られました。また、文部省科学研究費特定領域研究「蛋白分解のニューバイオロジー」の領域代表者や国際プロテオリシス会議の議長を務められ、我が国のみならず世界のプロテオリシス研究の推進に多大な貢献をして来られました。その他にも、ヒューマンフロンティアサイエンスプログラムの審査委員や、多くの国際学術誌の編集委員長、編集委員として、国際的にも指導的な立場で活躍して来られました。

先生は、日本のプロテオリシス研究を創成期から率いてこられた第一人者として、この分野の今日の興隆を嬉しくご覧になっていらっしゃいました。リーダーシップを発揮されるに当たっては常に公正で、闊達な研究コミュニティーを育てることを第一にお考えになっておられた先生のご遺徳を偲びつつ、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(分子細胞生物学研究所)

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
22.4.15	竹内 康雄	宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設准教授	神戸大学大学院理学研究科教授
22.4.20	班目 春樹	大学院工学系研究科教授	内閣府原子力安全委員会委員
（採 用）			
22.5.1	清水 敏之	大学院薬学系研究科教授	
22.5.1	今井 浩三	医科学研究所附属先端医療研究センター教授	
（昇 任）			
22.4.16	石川 靖彦	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
22.4.16	神原 淳	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科講師
22.4.16	喜多 浩之	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
22.4.16	藤原 徹	大学院農学生命科学研究科教授	生物生産工学研究センター准教授
22.4.16	國場 敦夫	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
22.4.16	染田 清彦	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
22.4.16	開 一夫	大学院総合文化研究科教授	大学院情報学環准教授
22.4.16	望月 公廣	地震研究所附属地震予知研究センター准教授	地震研究所附属地震予知研究センター助教
22.5.1	大谷 航	素粒子物理国際研究センター准教授	素粒子物理国際研究センター助教
22.5.1	天野 史郎	大学院医学系研究科教授	医学部准教授
22.5.1	香取 秀俊	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
22.5.1	津本 浩平	医科学研究所附属疾患プロテオミクスラボラトリー教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
（配置換）			
22.4.16	堀本 泰介	大学院農学生命科学研究科准教授	医科学研究所准教授
22.4.16	植田 一博	大学院情報学環教授	大学院総合文化研究科教授
（兼 務 命）			
22.5.1	今井 浩三	医科学研究所附属病院長	医科学研究所附属先端医療研究センター教授
（兼 務 免）			
22.5.1	山下 直秀	医科学研究所附属病院長	医科学研究所附属病院教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

平成22年度
学内広報発行スケジュール



問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

号数	原稿バ切	発行日 (校了)	配布
1400	5月 28日(金)	6月 22日(火)	6月 28日(月)
1401	6月 29日(火)	7月 26日(月)	7月 30日(金)
1402	7月 28日(水)	8月 25日(水)	8月 31日(火)
1403	8月 30日(月)	9月 24日(金)	9月 30日(木)
1404	9月 30日(木)	10月 25日(月)	10月 29日(金)
1405	10月 29日(金)	11月 24日(水)	11月 30日(火)
1406	学生生活実態調査号		
1407	11月 26日(金)	12月 17日(金)	12月 24日(金)
1408	1月 6日(木)	1月 25日(火)	1月 31日(月)
1409	1月 31日(月)	2月 22日(火)	2月 28日(月)
1410	2月 28日(月)	3月 24日(木)	3月 30日(水)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

Contents

特集

- 02 東京大学運動会航空部 全日本学生グライダー競技選手権大会3位

NEWS

一般ニュース

- 06 産学連携本部
東京大学産学連携本部／大阪大学産学連携推進本部共催シンポジウム「大学発ベンチャーによるグリーンイノベーション」を開催
- 06 本部人材育成課
平成 22 年度新任教職員研修を開催

部局ニュース

- 08 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で新入生の歓迎会行われる
- 08 大学院人文社会系研究科・文学部
PESETO 人文学会議、開催される
- 09 大気海洋研究所
ベトナム科学技術アカデミーの一行が大気海洋研究所を訪問
- 09 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で自衛消防訓練行われる
- 10 大学院農学生命科学研究科・農学部
附属生態調和農学機構の開所式及び開設記念公開講演会

キャンパスニュース

- 11 本部入試課
平成 22 年度入学者数決まる
- 12 本部学務課
平成 22 年度進学指導担当教員、決まる

コラム

- 14 PCリユースのわ 第7回
- 14 インタープリターズ・バイブル vol.34
- 15 Policy + alt vol.09
- 16 Crossroad 産学連携本部だより vol.54
- 17 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第51回
- 17 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～
- 18 噴水 特別寄稿 英語のブートキャンプから世界へ：東京大学の国際化を考える

INFORMATION

募集

- 19 国際本部 AGS 推進室
平成 22 年度東京大学 AGS 研究会研究課題の募集

お知らせ

- 20 情報基盤センター
各キャンパスで開催！
専門分野のデータベース講習会のお知らせ
- 21 大学院農学生命科学研究科・農学部
第 38 回東京大学農学部公開セミナーのお知らせ

◆表紙写真◆

グライダー機内から見た眼下の光景（2 ページに関連記事）

- 22 海洋アライアンス
海洋アライアンスシンポジウム「第5回 東京大学の海研究－地球システムとしての海－」のご案内

訃報

- 23 高橋進教授
- 24 佐田登志夫名誉教授
- 25 鈴木紘一名誉教授

事務連絡

- 26 人事異動（教員）

淡青評論

- 28 アジアの研究者を村に連れて行く



編集後記

東大航空部の特集はいかがでしたか。今月号の特集は、原稿は航空部の学生さんに作ってもらい、ページデザインは私が作らせていただきました。ページのレイアウトを作りながら、私も空を飛んでみたいと何度も思いましたが、あいにく募集は学生パイロットのみのようなので、写真をみて空を飛んだ気分を味わうにとどめたいと思います。皆さんも学内広報を片手に快適な空の旅をお楽しみください。（ち）



七徳堂鬼瓦

アジアの研究者を村に連れて行く

研究所を訪ねてきたアジアからの研究者を、南房総の私の実家に連れて行くことが時々ある。かの国のお国柄かその方の個性か、農村で目にする事物に対する反応や感想がちょっと予想外で興味深い。

タイやミャンマーの研究者には、まず鋸山の大仏様にお参りしていただく。ここは、鎌倉、牛久に次ぐ、上座部仏教徒の巡拝地となっているらしく、大陸部東南アジアからやってきた人たちとしばしば出会う。ミャンマーからの友人は農村の組織化に興味があるとのことで、水利組合、

森林組合、出荷組合などに連れて行った。真剣にメモを取るのには、詳細なレポートを上級官庁に提出しなければならないからだが、それが生かされたという話は聞いた事がない。それよりも彼が好奇心をそらされたのが、ペットボトルで作ったモグラ駆除器。これは早速祖国でも役立つことになった。タイの農業大学の準教授は実家の農業を手伝ってくれた。彼が興味を持ったのは、蛙の「雑草」である。タンポポ、ツクシ、ヨモギなどを指差し、"edible?"を連発するのである。ついでに幼少期に食べていたドジョウやタニシと農薬の話もした。彼がタイ式「ノビルご飯」を炊いてくれたが、新米のコシヒカリが柔らかすぎたのだろうか、タイ米のようにはうまく炊けなかった。エジプト人の研究者は、タイやミャンマーの友人と違って、神社と寺が隣り合って建っていることが不思議でたまらないようだった。集落に関わる両者の役割の違いを説明したのだが、分かってもらえただろうか。

学生も時折連れて行く。農村金融、産直、農協など、関心は様々である。ところが、立毛状態にある農作物の名前を言えない。キャベツやカリフラワーは大丈夫、ニンジンやダイコンになるとかなり危うい、ラッカセイやゴボウとなるともうお手上げである。大学では教えないかもしれない知見が、アジアでの農村経済調査の際、農民とのインタビューや農業景観の記述に役立つことがある。自分の調査目的以外の事象にも広く目配りしてほしいと思う。

高橋昭雄（東洋文化研究所）

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1399 2010年5月25日
東京大学広報室

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課
TEL: 03-3811-3393
e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>